
兄弟

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄弟

【Nコード】

N1890F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ウィリアム卿は両親をなくした直後腹違いの弟の存在を知った。はじめは疎ましく思っていたがやがて。イギリス貴族のお話です。

第一章

兄弟

ウィリアム・スチュワート公爵がその話を聞いたのは両親が死んで間も無くだった。僅か十五歳で家督を継ぐことになった彼に届いた知らせだった。

「私の弟!？」

「そうです」

自身の邸宅で話を聞いた。白い左右対称の薔薇で飾られたその家で彼は自身の執事から話を聞いていた。まず話を聞いて目を顰めさせた。

「弟様ですが」

「そんな話は聞いていないぞ」

その顔で執事に答える。自分が物心ついた頃から仕えているその執事に。

「何処からそんな話を」

「お父上ですが」

「父上が」

ついこの前に死んだその父だ。先代の公爵であり事故で妻と共に死んでしまった。彼は若いながらもその葬儀を気丈にも執り行ったすぐ後だったのだ。

「そうです。とある酒場の娘と恋に落ち」

「父上は確かに」

ここで彼は自分の父について思い出すのだった。

「酒好きだったし若い女性も好きだったが」

「ですから。御一人」

「子供がいたのか」

「御安心下さい。弟様だけです」

何故か執事はここで安心しろと彼に言うのである。

「それも御一人で妹様はおられませんので」

「それは安心することか？」

「何か驚いておられますので」

何故か今も冷静な執事である。彼は傍から見てもかなり動揺しているあ。

「こう申し上げたのですが」

「驚かずにいられるか。僕……いや私に弟がいたなんて」

「よくある話です」

ここでも落ち着いている執事であった。

「こうしたお話は」

「確かにな」

彼も十五だ。だからこれはわかった。イギリス貴族は使用人に手を出してもいいとされていた。ローマ帝国の法に倣いそうになっていたのだ。だがそれでも自分の家のことになるとは思わなかった。だから驚きを隠せなかったのだ。しっかりしているとはいえ彼はまだ十五なのだ。

「しかし。それでもだ」

「それでその弟様ですが」

「ああ」

赤い髪と青い目の細面の流麗な顔で応える。黒を基調として赤で縁を飾った絹の服で身を包んでいる。その服は何処か軍服とマントを思わせるものがある。赤く長い髪にそれがよく似合っていた。

「今一歳になられます」

「一歳だと！？」

「はい」

執事はまた冷静に答えてきたのだった。

「そうでございます」

「では父上がついこの前に」

「その通りです。お作りになられた方です」

「何ということだ。母上も御存知だったのか」

「それを知るのもまた奥方の務めでございます」

「確かにそうだが」

この時代の貴族社会、とりわけフランスにおいては不倫は当然のことであつた。結婚もまたビジネスであつた時代なのである。

「しかし。一歳か」

「左様です」

「赤子だな。まだ」

「しかも御母堂はおられません」

「待て」

執事の言葉に今度は険しい顔になった。

「母親がいらないとはどういうことだ」

「残念なことに産後のひだちが悪く」

この時代ではこれもまたよくあることだつた。出産は母親にとって命懸けであつた。長い間これは変わることがなかったのだ。

「それで」

「そうだったのか。それでは」

「弟様は身寄りがおられません」

執事はこう彼に答えてきた。

「今は。誰も」

「そうか。同じだな」

ウィリアムはここで己のことにも重ね合わせたのだつた。

「私と。同じだな」

「確かにそうなります」

「親に先立たれた」

しかも父親は同じである。このことが話とウィリアムの感情をかなり複雑なものにさせていたがそれでもこう思ふのであつた。

「私と同じか。しかも」

「弟様です」

「私は一人になった」

ウィリアムはここで言つた。

「しかしだ。その弟も一人だな」

「そうでございます」

「一人と一人だ」

ウィリアムはまた言った。

「それを合わせれば」

「合わせれば」

「二人だ」

それが彼の答えであった。二人が、である。

「二人だな。よし」

「どうされますか？」

「弟をこの屋敷に呼ぶのだ」

こう執事に告げた。

「すぐにな。いいな」

「宜しいですね」

「構わない。そしてだ」

彼はさらに言う。

「私の弟だ。弟として育てる」

「弟様としてですか」

「他に何がある？」

今執事に問うたのには理由がある。貴族の私生児は多かったが、そういつた子の殆どは使用人として使われることが多かったからだ。少なくとも家督相続権というものはなかった。

「私の弟だ。間違いなくな」

「左様ですか」

「そうして育てるのだ。いいな」

「わかりました。それでは」

「そして言うておく」

ウィリアムの言葉がきついものになった。

「これは守っておくように」

「何でしょうか」

「あくまで私の弟だ」

このことを強調するのであった。

「私のな。生まれがどうか言う者がいたならば」

「その場合は」

「私が許さん」

言葉がさらにきついものになっていた。

「決してだ。それは忘れるな」

「必ず。家の者達にもそれは伝えておきます」

「そう、家の者達全てに伝えておけ」

「このことをですな」

「それだけではない」

彼はなおも言うのであった。やはり言葉がきつい。

「若しこのことに僅かでも不満があるならば」

「その場合は」

「暇を出す。即刻な」

「即刻ですか」

「そうだ。このことは特に強く伝えておくようにな」

こうまで言うのだった。

「わかったな」

「はい。それでは」

「ではすぐに弟を迎えてくれ」

声は普段のものに戻り執事に告げるのであった。

「迎えの用意だ。これから忙しくなるぞ」

「はい」

こうして彼は弟を屋敷に迎え入れた。弟の名前はジョージといった。彼はすぐに弟に使用人達をつけ面倒を見させた。それと共に自分自身も何かと弟の世話をするのだった。

「そう、これだ」

積み木を自分で手に取って彼に教えたりもしている。

「これをこうやって。わかるな」

まだ言葉を話すことのできないジョージは微笑んで彼に答える。
彼と同じ赤い髪と青い目が目に入る。

そして彼が教えた通りのことをしてみせる。彼はそんな弟を見て
いつも微笑むのだった。

「ジョージは賢い子だ」

「確かに」

自分の家で執事に話す。執事もその言葉に頷く。

「実にな。あれでは大丈夫だ」

「その通りでございます。それではそろそろ」

「話せるようになってきたか」

「まだ僅かですが」

こうウィリアムに答えるのだった。

「そろそろでございます」

「立つこともできるようになった。後は機を見計らって」

「家庭教師をつけられるのですね」

「そうだ。私が学校にいる間はだ」

「私共にお任せを」

「頼むぞ。幸いにして」

ここで彼は言う。

「私は学校にはここから通える。寮には入らなくて済んでいる」

「本来は寮に入られるおつもりだったのですが」

「仕方ない」

諦めの言葉をそれと同じ顔で出した。

「今はな。父上も母上もおられなくなった」

「はい」

「そして。ジョージがいる」

これが最も大きな理由であつた。彼は若き主として振る舞いつつ
もこのことを決して忘れていなかったのだ。あくまでジョージの兄
として側にいたのだ。

第二章

「ここを離れるわけにはいかない」

「今はですか」

「これからもだ」

ここで意外な言葉を出した。

「これからもだ。それは」

「これからもといえますと」

「あいつが成長して結婚するまで」

随分と先のことまで話すのであった。

「私はあいつを見守っていきたいのだ」

「そこまですか」

「駄目か？」

ここまで話したうえで執事に問うた。

「それは。私のこの考えは」

「そうは思いませんが」

一応は肯定しているがそこには妙に挟まったものがある返答であった。

「それでも。やはり」

「私自身のことか」

「御結婚はされますな」

「おい、それを言うのか」

自分のことを言われて思わず苦笑いになる。安楽椅子に座ることなく立って話をしていたがここでふと足が動いた。

「私はまだ十六だぞ。そんな話はまだ」

「早いうちに決めるのがいいことですが」

「今はまだ考えられない」

これが彼の返答だった。

「今はな。あいつを見ていたいのだ」

「左様ですか」

「あいつは私が育てる」

言葉に強い決意が宿った。

「必ずな」

「それでは今は」

「そうだ。それでだ」

話をジョージに関することに移してきた。

「何年か経てばだ」

「どうされますか」

「家庭教師のことも考えておかなければな」

次に言ったのはこのことであつた。

「そのこともな。それも考えておいてくれ」

「はい、それもまた」

「これから忙しくなるな」

窓を見ての言葉である。真剣であつたが微笑んでもいた。

「かなりな。だがきつとな」

彼はジョージを育てていった。やがて赤子から子供になり家庭教師までつけられるようになった。彼の弟としてまんべんなく育てられていた。彼はジョージを愛しジョージもまた彼を慕っていた。だが周りではそんな彼等を馬鹿にする者も少なからずいたのであつた。「今何と言つた」

あるパーティーの席においてのことであつた。ウィリアムは険しい顔で相手に詰め寄つていた。

「何と。もう一度言つてみるんだ」

「よからう」

相手は鋭い目をした痩せた男だつた。当然ながら彼もまた貴族である。その彼はウィリアムを嘲笑する目で彼に対して言うのであつた。

「変わった道楽をお持ちだな、スチュワート公爵は」

「私の道楽とは何だ」

「妾の子を弟といつて育てている」

このことに他ならなかった。彼もまたこのことを嘲笑しているのである。

「それが変わった道楽と言わずして何というのだ」

「私のこれは道楽ではない」

険しさをさらに増した目で言い返す。

「ジョージは私の弟だ。紛れもなくな」

「妾の子は家族ではない」

当時の貴族社会の常識である。

「卿もまた。酔狂なことだ」

「ほう、酔狂か」

今の言葉が彼をさらに刺激した。そしてさらに鋭い目で相手く見据えて問うてきた。

「今酔狂と言つたな」

「うむ、言つた」

「その言葉。訂正する気はないな」

「私は貴族だ」

相手の貴族は傲然とした態度で彼に返す。

「酔狂な趣味を持たないな」

「わかつた。では話はわかつた」

ウィリアムはここまで話を聞くとそれ以上は彼に対して聞くことはしなかった。そのかわりに懷から何かを取り出してきた。それは。

「決闘か」

「そうだ」

それは白手袋だった。どういう意味を持つのかは最早言うまでもなかった。それを見た相手も冷静な態度で彼に対して応えるのだつた。

「では。どちらだ」

「銃か剣かということか」

「そうだ。どちらだ」

こうウィリアムに問い返す。

「私はどちらでもいいがな」

「では剣だ」

ウィリアムはすぐに彼に言葉を返した。

「剣だ。それでいいな」

「場所は」

「この入り口でだ」

「では今すぐにだな」

「不服か？」

鋭い目で相手に問い返す。

「それでは」

「構わん。それではすぐにな」

「その言葉後悔させてやる」

「妾の子という言葉か」

「その通りだ。卿があくまで取り消さないというのだからな」

決闘というわけだった。やはりここでも目が鋭い。

「侮辱は晴らす」

「侮辱か。何が侮辱なのか」

「わかっていないならいい」

顔には出さないが既に怒りはとうの昔に限界を越えていた。そうして入り口に出てそれぞれ剣を手にする。そのうえで決闘に入るのだった。

第三章

このことはすぐに社交界中の噂になった。ウィリアムといえば若いながら冷静沈着な人格者として知られていた。その彼が決闘をするなどとは信じられないことだったのだ。

だがそれでも決闘をした。誰もが驚かずにはいらなかった。

彼は決闘に勝った。相手も傷こそ負ったがそれでもであった。誰も驚きを隠せないのだった。

「またどうしてだ」

「スチュワート公が」

「何でもあれらしいぞ」

噂話をする者達のうちの一人が言った。

「弟君を愚弄したとからしい」

「弟君を！？」

「そうだ」

こう答えるのであった。

「弟君をな。愚弄された為に怒ったらしい」

「おかしいな」

これを聞いて誰もが言った。

「公爵に弟君なぞおられたか？」

「確かあの方は」

ここで皆言うのである。首を傾げつつ。

「御一人ではなかったのか？」

「それがどうして」

「それだ」

一人が険しい顔をして一同に語るのだった。

「先代の公爵がな」

「卿の父君が」

「そうだ。あの御仁が他所で作った子だそうだ」

「何だ、それでは私生児ではないか」

「洗礼は受けていてもな」

「うむ、そうだ」

こういうことになるのだ。本来ならば洗礼を受けていればそうはならないがそうならないのがキリスト教社会だ。その視誠意への迫害は宗教的、しかも絶対のものがあある為に他の社会よりもかなり厳しい。とりわけ戒律の厳しさで知られるプロテスタントの社会では言うまでもなくイギリス貴族では主流はイギリス国教会だ。つまりプロテスタントである。

「だからだ。本来は違うのだが」

「それでもですか」

「ううむ。それはな」

「どうということなのだ」

「理解不能だ」

彼等の結論はこれしかなかった。

「妾の子に何故」

「あそこまで」

「だからだ。弟君だからだ」

ここでまた言われる。

「だからこそだ。侮辱を受けたと」

「わからんな」

どうしてもわからないというのが彼等だった。

「しかも学校にまで通わせてな」

「あのままイートンでも入れるつもりか」

イギリスの名門校だ。イギリスにおいてはこのイートンの出身というだけでかなりのものを約束されてきた。燕尾に似た制服がトレードマークだ。

「それどころかオックスフォードかケンブリッジらしいぞ」

「公爵はケンブリッジだったな」

「ああ」

イギリスの名門大学だ。かつてはオリバー・クロムウェルもいた。

「ではその弟君もケンブリッジか」

「そうなるのか」

「どう考えてもわからない」

やはりわからないというのだった。

「何故そうなるのだ？」

「公爵は。弟君と思われるのが」

「しかもだ。正統な弟君と考えておられるのだろうか？」

「如何にも」

やはりこれがわからないのだった。これに関しては欧州の貴族社会なら何処でも同じでありトルストイの息子の一人も家督相続権を持っていなかった。正妻の子ではなかったからだ。

「酔狂と言っしかないが公爵は本気であられる」

「何か言えばそれこそだ」

「決闘か」

「それだ」

話す一同の顔が嫌悪に満ちたものになっていく。

「だからだ。公爵の前ではこれは言わないでおこう」

「そうだな」

こう結論が出るのだった。そうして彼等は今は公爵の前では沈黙を守った。しかしウィリアムはこのことを完全に見抜いていたのだった。彼は己の屋敷で執事に対して話していた。

「あの決闘や巷での噂は聞いている」

「左様ですか」

「私やジョージに対して色々と言っているな」

「それに関しましては」

「言わずともいい」

執事に対して冷静に言葉を返した。

「わかっている。ジョージは馬鹿にされている」

「はあ」

「妾の子だからだ」

それ以外に理由はない、断言さえしていた。

「ジョージがな」

「それですか」

「だがそれは違う」

しかしここでウィリアムは言った。しっかりとした声で。

「それはな。違うのだ」

「ではジョージ様は」

「私の弟だ」

はつきりと言い切ってしまった。今ここで。

「それ以外の何者でもない」

「ではこのままイートンに入って頂き」

「ケンブリッジにもな」

巷の噂通りのことを考えていたのだった。彼はあくまで弟のことを考えていた。

「入ってもらう。先はどうなるかわからないが」

「爵位につきましては」

「一応話は出ている」

このことも話すのだった。

「男爵か。そうしてもらうことになっている」

「男爵ですか」

「伯爵、いや子爵」

いづれも貴族の爵位である。公爵からはじまり侯爵、伯爵、子爵、そして男爵となっている。男爵は爵位を持っている貴族の中では最も下とされているのだ。

第四章

「最低限そうさせてもらいたかったが」

「やはり難しかったですか」

「妾の子だからな。しかし」

苦い顔をしつつも言葉を続ける。

「約束は取り付けた」

「約束？」

「そうだ。何か功績があれば子爵にしてみらうことになった」

「それはまた」

「話をつけるのに苦労した」

このことを話して少しうんざりとした表情を見せた。

「首相達にな」

「王室の方々は」

「何とか納得して頂いた」

何とかという言葉にも彼の苦労が滲み出ていた。しかしそれでも満足している顔であった。

「何とかな」

「そうですか」

「さて、それでだ」

あらためて執事に対して語る。

「イートンにも話はつけた」

「既にですか」

「ジョージは必ずやってくれる」

そして言った。

「必ずな。あの男はやってくれる」

「やってくれますか」

「私にはわかつている」

自信ではなかった。確信だった。その確信を執事に対してはつき

りと見せていた。

「できる男だ」

「では必ず道を開かれると」

「見ていればいい」

今度は言葉が微かに笑っていた。

「あの男のやることをな」

「わかりました。それでは」

「私がやることは背中を守ることだ」

「背中をですか」

「それが私の仕事だ」

そしてこう話す。

「先の決闘の時と同じだ」

「決闘のことですが」

「周りが何を言っても気にはしない」

彼はここでも言い切ってみせた。

「ジョージにも気にはさせない」

「それもまた大変な苦勞があると思われませんが」

「兄の務めだ」

貴族が持っている独特のノブレス・オブリージュ、即ち高貴なる者の義務にも似た心がここにはあった。その心を彼自身も確かに感じていた。

「これはな」

「では宜しいですね」

「だから言ったな。私は兄だ」

やはり貴族のノブレス・オブリージュを思わせる言葉だった。ノブレス・オブリージュは当然ウィリアムにもありそれが変化した形の心だったのだ。

「それならばだ」

「左様ですか」

「そうだ。だからいいのだ」

「またしても言い切った。」

「弟を愚弄する者は私が許さない」

「どうしてまたそこまで」

「理由は一つしかないだろう」

「真剣な顔で執事に言い返す。」

「弟だからだ」

「弟君だからですか」

「その通りだ。それ以外に理由はない。ただ母が違っただけだ」

「それだけですな」

「父が違っ、母が違っ」

「ここでこう言うのだった。」

「例え両方が違っていてもだ。兄弟であることには変わりがない」

「変わりがありませんか」

「絆だ」

「今度は絆という言葉が出された。」

「兄弟はな。絆により兄弟となっている」

「確かに」

「わかるな。それではだ」

「ジョージ様のお背中をそのまま」

「そっだ、守っていく」

「毅然とした顔で述べた。」

「何があってもな」

「では旦那様」

「それを受けて執事は一旦姿勢を正した。そのうえで持っていたベルを鳴らした。」

「ベルを？」

「すぐにおわかりになられます」

「声は微笑んでいた。その微笑みと共に今部屋の扉が開いた。ノックはしたがウィリアムスはここで入れと言っことを忘れてしまっていた。だが今はそれは構わなかった。」

何故なら部屋に家にいる全ての使用人達がやって来たからだ。そのせいで何も言うことはできなかったのだ。

「御前達、どうして」

「今ベルを鳴らしましたので」

「それで呼んだのだな」

「はい」

執事はこう答えた。

「その通りです」

「そうか。呼んだか」

「今旦那様の御心は受け取りました」

「私の心をか」

「そうです。確かに」

今度は執事が言い切るのだった。

「その御心。ですから」

「どうするのだ？」

「及ばずながら私達も」

執事が言うつとすぐに。他の使用人達も頭を垂れた。しかも一斉だった。全ての物がウィリアムに対してその心を見せたのである。

「御主人様のその思いに」

「御一緒させて頂きます」

「御前達、それは」

ウィリアムは彼等の心がわかった。今何を皆で誓ったのか。それを理解した彼は己の顔が緊張で強張っていくのも感じ取っていた。

「いいのだな、それで」⁶

「そうでなければここに集まりません」

執事が一同を代表して彼に告げてきた。

「違うでしょうか」

「確かにそうだ」

それは彼にもわかった。

「しかし。これは」

「困難であることはわかっています」

「元よりそれは承知のことです」

彼等はそれぞれの口でこう答えてきた。

「ですが最も困難なのは」

「御主人様の筈です」

「私がか」

こう言われて自分自身のことと考えてみる。しかし彼自身にはその意識はないのだった。既に覚悟を決めているからであろうか。あつさりとしたものだった。

「困難だというのか」

「違いますか？」

「私はそうは思わない」

このことをはっきりと彼等に対して告げた。

第五章

「私はな」

「それはまたどうしてでしょうか」

「既に決めている」

「これが返答だった。」

「だからだ。困難とは思わないのだ」

「左様ですか」

「二言はない」

少なくともこのことに関してはそうであった。

「困難とは思わない。決してな」

「そう、そうです」

「私達もそうなのです」

ここで彼等はまた彼に対して言ってきた。

「既に決意しましたから」

「ですから」

「困難ではないと」

ウィリアムはあらためて彼等に対して問うた。しかし声のトーンが少し低くなってきた。緊張がそうさせてしまっているのだ。

「そう言うのだな」

「御主人様と同じですから」

「だからこそ」

「わかった」

遂に彼等の心を受けることにしたのだった。これもまた決意であった。

「そういうことならばな。受けさせてもらおう」

「有り難き御言葉」

また執事が頭を垂れて応える。

「それでは我等これから尚一層」

「ジョージ様の御為に」

「頼むぞ」

彼等に顔を向けての言葉であつた。身体までも向けて完全に正対している。

「その心でジョージを」

「わかつております」

「私共もまたジョージ様を愛しております故」

「愛しているのか」

「はい、その通りです」

彼等の今回の行動の最大の根拠であつた。

「だからこそです」

「御主人様と同じく」

「私はそうされるべき人間ではないぞ」

使用人からの愛の言葉を聞いて苦笑いを浮かべてしまったウィリアムであつた。

「その様なな」

「いえ、それでもです」

「私達にとって御主人様は」

「愛される存在というのか」

やはり自分では実感がないことであつた。

「私かな」

「御自身ではお気づきになられていないだけです」

また執事が彼に言ってきた。

「このことに」

「そうです。ですが私共は」

メイドの一人の言葉は少し強いものであつた。

「御主人様を」

「お慕いしておりますので」

「その心、受け取らせてもらう」

この心もまた、であつた。ウィリアムはこの時再び真剣な顔に戻

っていた。

「是非な」

「はい、有り難うございます」

「ではこれからもまた」

「私だけではなくジョージも頼む」

かえすがえすも念を押すウィリアムであった。

「むしろ私のことはまだいい。ジョージをな」

こうまで言うのであった。彼はあくまでジョージのことだけを考えていた。それからも弟を侮辱する者がいればすぐに決闘を売り倒してきた。家ではジョージに対して何かと世話を焼き兄というよりは父に近い感じになっていた。確かに彼はジョージにとって父親に近い存在になっていた。それはこの時も同じだった。

「もうすぐ大学も卒業だな」

夕食の時だった。大きな細長いテーブルに彼とジョージが向かい合って座っている。シェフに作らせた羊肉の料理を食べながら弟に對して言ったのである。

「そうだな」

「うん、やつとね」

「それは何よりだ」

ジョージからの言葉を聞いてまずは微笑むのだった。

「そういえば聞いたのだが」

「どうしたの？」

ジョージは確かに彼と同じ髪と目の色だが周囲に与える印象は全く違っていた。兄とは違い髪は短く顔も鋭利なものではなくやや童顔で温厚なものだった。何処か中性的でそれが彼を優しい印象に見せていたのである。服も赤いベストにズボン、ネクタイ、それと白いブラウスで兄よりはかなり大人しい服装である。

「かなり優秀な成績だったそうだが」

「いや、別にそれは」

「隠さなくていい」

肉を切りながら弟に対して微笑むのだった。

「首席だそうだな。何よりだ」

「まあそれは」

「いいことは隠さなくていいのだ」

言葉が少し説教じみていた。

「御前にとつていいことなら尚更な」

「それはそうだけれどね」

「そういうものだ。そしてだ」

ジョージに対してさらに問うてきた。

「これからどうするのだ」

「これから？」

「そうだ。まず大学を出た」

「うん」

「その後まず爵位を授けられる」

このことも彼に伝えた。

「男爵位をな。だがそれで終わりではないのだ」

「どうして務めを果たすかだね」

二人はここでは収入のことは気にしてはいなかった。大貴族であるのでそうしたことは一切気にせずに暮らしていけるのである。そうした意味では有り難い立場である。

「これから」

「そうだ」

はつきりとした声で弟に答えたのだった。

「その通りだ。励むようにな」

「うん。ところでさ」

ここでジョージはふと言ってきた。

「兄さん、一つ聞いていいかな」

「何だ」

「兄さん。結婚はしないの？」

こう兄に問うのだった。

「まだ。もう三十も超えて」

それでも美貌はそのままだ。相変わらず毅然とした美しさを持っているウィリアムである。赤い髪の艶も実に映えている。若々しいと言ってもいい。

「まだなの？」

「そういえばまだだったな」

ふと気付いたように答える兄だった。

「それはな」

「そういえばって何か他人事じゃない」

「私にとっては今はどうでもいいことだ」

そしてこう弟に言うのだった。フォークとナイフを使う手も全く動揺している様子はない。顔色もそうであり本当に何とも思っていないことがわかる。

だがそれでもジョージは。兄に対して問うのであった。

「それでもさ。やっぱり」

「結婚する気はある」

一応は、といった返答であった。

「それはな」

「けれどしないんだ」

「今はな」

「今はって」

やはりジョージにとってはどうにも納得のいく返答ではなかった。

「何で今じゃないの？それは」

「そうだ。今ではない」

やはり表情を変えずに答えるウィリアムだった。

「今ではな」

「じゃあ一体何時なんだ？」

「それを言うつもりはない」

本当に無愛想なものであった。

「今はな」

「今は今はって」

「私のことはいい」

話を切ってさえきた。

「私のことは。それよりだ」

「僕のこと？」

「そうだ。御前はどうかのだ」

クールな目でジョージを見つつ問うてきた。

「御前は。どう考えているのだ」

「一応はね。まあ」

首を捻り苦笑いしつつ兄に答えてきた。フォークとナイフを使う手が少し鈍っていた。

「考えている娘はいるけれどね」

「いるのか」

「うん、いるよ」

こう答えはする。

「けれどちょっと」

「一度私に会わせてもらおうか」

「えっ!？」

「聞こえなかったか」

驚く弟にいつもの冷静さで返す。

第六章

「言ったぞ。会わせてもらおうかな」

「いいの？本当に」

「いいと言っている」

やはり冷静な言葉だった。

「私かな。だからいい」

「そうなんだ。じゃあ」

「一つ言っておく」

ここで不意にといった感じで弟に告げてきた。

「いいか」

「！？何を？」

「ただ御前が選んだその人だけを見る」

この時はフォークもナイフも止めていた。グラスも持つてはいない。

「その人だけをな」

「その人だけをつて？」

「身分やそういったものを見ないということだ」

はつきりと言うのだった。

「わかったな」

「身分に関係なくつて」

「何かおかしいところがあるか」

表情は変わらない。相変わらず冷静なままである。

「私の言っていることに」

「そう言われたら」

ジョージも返答に困るのだった。何しろ彼は所謂正妻の子ではない。私生児と言ってもいい。その彼が身分を意識せずにはいられなかったがそれでもウィリアムは言うのだ。

「僕は。まあ」

「いいな」

「うん」

兄の言葉にこくりと頷いた。

「じゃあ。今度この屋敷に呼んで来るね」

「頼むぞ。それではな」

また弟に対して告げる。

「楽しみにしている」

「うん。今度ね」

こうしてジョージは兄に自分の恋人を会わせることになった。すぐにその日になった。彼が連れて来たのは茶がかったブロンドに緑の目をした小柄な女の子だった。服装を見ればロンドンに普通にいなそうな素朴なものだ。顔にはソバカスがあり如何にも垢抜けない。本当に地味な風貌であつた。

「この娘だよ」

「はじめまして」

女の子はジョージに紹介されたうえでウィリアムに頭を垂れた。おずおずとした動作であつた。

「キャサリン」マクネアーと申します」

「マクネアーか」

ウィリアムがまず注目したのは名前だった。

「ということはアイルランド系かスコットランド系か」

「父はスコットランドの生まれです」

静かにこう答えたのだ。

「スコットランドからこちらに流れてきて」

「ふむ」

「靴屋をしております」

「そこに僕がお客さんとして入つてね」

そのキャサリンの横でジョージが馴れ初めを説明してきた。

「それがはじまりだつたんだ」

「そうか」

そこまで話を聞いて静かに頷く。

「スコットランド系で靴屋の娘さんか」

「はい、そうです」

また静かに頷いて応えるキャサリンだった。

「弟様とは。その」

「それでね、兄さん」

ジョージが戸惑いながら兄に言ってきた。

「僕はこの人と。その」

「結婚したいというのだな」

「う、うん」

兄に機先を制されて戸惑いを感じたがそれでも答えた。

「だから。まあ」

「わかっていた」

静かに戸惑い気味の弟に対して告げた。

「というよりは察した」

「そうだったんだ」

「御前のその態度を見ればな」

微笑んだ顔をジョージに向けて述べたのだった。

「すぐにわかる」

「そうだったんだ」

「そうだ。それでだ」

「うん」

「あらためて聞こう。その人だな」

念を押すようにしてジョージにまた問うてきた。

「その人が御前の」

「まだ。口約束だけだけれど」

少し俯き気味に兄に述べる。

「それでもね。けれど」

「私に断りを得てからだというのだな」

「わかるんだ」

「わからない筈がない」

こう言ってまた微笑むウィリアムだった。

「私は御前の兄だからな」

「僕の兄さんだから」

「そしてだ」

さらにジョージに言うのだった。ここでさらに。

「御前の目もよく知っている」

「目も？」

「キャサリンさん」

今度はキャサリンに顔を向けた。そして彼女に声をかけたのだった。

「この弟を宜しく御願います」

「えっ!？」

驚いたのはキャサリンの方だった。今のウィリアムの言葉に。

「今何と」

「兄さん、今の言葉は」

「この言葉のままだ」

微笑みをそのままにジョージに答えるのだった。

「このな」

「じゃあいいの」

「御前の目は知っていると聞いた」

またこのことをジョージに告げる。

「そうだったな」

「それはそうだけれど」

「だからだ。この人は御前に相応しい」

「僕に」

「いい人だな」

静かな微笑みと共にこう言った。戸惑ったままのキャサリンの顔を時折見る。

第七章

「この人は」

「うん、それは確かだよ」

ジョージは顔を一気に晴れやかにさせてウィリアムに答えた。

「それはね。間違いないよ」

「間違いないか」

「とても優しくて気立てがよくて家事も凄く上手くて」

「しかも裏表がない」

今度言ったのはジョージだった。

「そうだな」

「その通りだよ。そこまでわかるんだ」

「御前の目も知っているが私の目にも自信がある」

「兄さんの目も」

「伊達に。ここまで生きてきたわけではない」

言葉には出さなかったが彼は貴族の社会で実に多くの人間を見てきた。権謀術数も渦巻く貴族の世界を。だからこそ言えた言葉だったのだ。

「だからだ。わかる」

「そうだったんだ」

兄の言葉を静かに聞いていた。

「それで僕達のことを」

「その通りだ」

「けれど。いいの？」

今度は心配そうな、おずおずとした声で兄に尋ねてきた。

「それで。本当に」

「何が言いたい」

「私自身のことです」

キャサリンが俯いたまま小さな声でウィリアムに言ってきた。

「貴女のことか」

「はい。私は」

ここで自分から彼女自身のこと告げるのだった。

「先程にも出ましたが」

「確か」

「私はスコットランド人です」

まず言ったのはこのことだった。彼女はイングランド人ではない。当時のイギリス社会ではスコットランド人やアイルランド人、ウェールズ人はイングランド人よりも下に置かれていた。このことを彼女もよく知っていたのだ。その下に置かれている人間だからこそである。

そしてキャサリンは。さらに言うのだった。

「私は貴族ではありません」

「ふむ」

「平民です」

このことも自分から告白した。

「靴屋の娘です。ですがこの方も貴方も」

「それを言われるのですね」

「その通りです」

また語るキャサリンだった。

「ですから。この方には」

「相応しくないと仰るのですね」

「スコットランド人の、しかも平民の私が」

声はさらに小さく泣きそうにさえなっていた。

「この方と結ばれるなんて。やっぱり」

「それがどうかしましたか」

しかしウィリアムはその俯くキャサリンに対して不意に言うのだった。

「それが。どうかされましたか」

「どうかされましたかとは」

「貴方のことはよくわかっています」

「ここでも言うのだった。」

「それはもう」

「ですが」

「御存知と思いますが」

怖気付いた様子を見せるキャサリンに自分から言ってきた。

「ジョージは我々の世界では暖かい目で見られてはいません」

「お母上がですね」

「そうです。だからです」

このことをキャサリンに対しても話したのだった。

「同じなのですよ」

「同じ……」

「平民だからといっても貴族だからといっても」

今言っていた。

「そしてスコットランド人だからといってもイングランド人だからといっても」

「違うないと仰るのですね」

「そう、その通りです」

今はつきりと言いつたのだった。

「少なくとも私はそう考えます」

「左様ですか」

「実はです」

ウィリアムはここで態度を少しさらにかしこまらせてきた。

「私も最初はジョージに偏見がありました」

「そうだったのですか」

「ですが」

ジョージに少し目をやっただうえでまた述べる。

「それは消えてなくなりました」

「どうしてですか？」

「まず。兄弟だからです」

このことを述べたのだった。

「兄弟ですから」

「兄弟ですか」

「そうです。つながっている血は半分ですが」

父親が同じというだけだ。世間では親が一人違うということでの
なりの扱いの差が出る場合がある。多くは母親の違いによってだが。

「しかし。兄弟なのです」

「左様ですか」

「思えば。運命でした」

今度はこう述べたウィリアムであつた。

「このことは。運命だったのです」

「運命!？」

「そうです、運命だったのです」

さらに述べるウィリアムであつた。

「私がジョージを授かったのは」

「その場合の運命とは」

「父と母が死んで間も無くのことでした」

まだ若き日、いやそう呼ぶのすらまだ届かないような十五の時の
話だ。その時に彼は両親を失いジョージの存在を知った。その時の
ことを語っていた。

「弟のことを知り最初は戸惑いました」

「そうだったのですか」

「受け入れるべきかどうか。迷ったのも事実です」

彼とてもそうした葛藤はあつたのだ。これからは完全に逃れるこ
とはできはしなかったのだ。例えば彼といえどだ。それはどうしても
であつた。

第八章

「ですが。それでも決意したのです」

「それで今があるのですね」

「そう、その通りです」

またキャサリンに対して頷いてみせた。

「その間に少しずつですが、はつきりわかったのです」

「兄さん……」

「御前は私の弟だ」

微笑んでジョージ自身に告げた。

「この世で二人だけのな」

「二人だけの」

「そう、そして」

さらに言う。

「これは御前に聞きたいのだが」

「何かな」

「私は。御前の兄か」

こう彼に問うたのだった。

「私は。御前の兄なのか」

「それは」

「それはどうなのだ」

弟に対してさらに問う。

「私は。御前の兄か。どうなのだ」

「決まってるじゃないか」

言葉の意味がわからず少し戸惑ったがそれでも言うのだった。

「兄さんは僕の兄さんだよ」

「そうか」

「うん、この世で一人だけの」

こつも兄に対して言う。

「僕の兄さんだよ。それ以外の何でもないよ」

「そうか、それを聞いて嬉しい」

素直な微笑みを弟に対して向けた。他ならぬ彼の返事を聞いて。

「それならな。そうか」

「僕はね、思うんだよ」

ジョージは自分から言ってきた。

「実はね」

「何をだ？」

「血はつながっていてもいなくても」

急にこう言うのだった。

「僕達は兄弟だよ」

「血はつながっていてもいなくてもか」

「絆があるじゃない」

彼が言うのはこのことだった。

「絆があるからね。だから」

「私達は兄弟か」

「そうだよ。兄さんは僕にとってたった一人の兄さんで」

「御前は私にとってたった一人の弟」

「血だけじゃないじゃない」

また血のことを話に出した。

「その絆があるからこそ」

「兄弟なのだな」

「今、僕はそう思うよ」

語るその目は静かに笑っていた。

「そうね」

「そうか。そうかもな」

そしてそれに頷くウィリアムだった。

「兄弟というものはな」

「そうじゃないかな。そして」

彼はさらに兄に言ってきた。

「兄さん、これから僕は」

「これから？」

「もう一つ、絆を作るよ」

微笑んでの言葉だった。これも。

「これからね。もう一つね」

「もう一つか」

「うん。キャサリン」

微笑みをキャサリンに向けた。

「その絆をこれから一緒に作る為にね」

「私と一緒に」

「そう。あらためて、いいかな」

「ええ」

返事はもうこれしかなかった。

「いいわ、是非ね」

「そう、それじゃあ」

「幸せにな」

笑顔になる二人にウィリアムが告げた。

「二人共。永遠にな」

「兄さん……」

「では、私もだ」

見ればウィリアムもまた笑顔になっていた。

「これから。その絆を作るとするか」

「作るってまさか」

今の兄の言葉にはつい驚いた顔になった。

「兄さんも」

「話は来ている」

少し照れ臭そうな顔を弟に見せる。

「私にもな」

「そうだったんだ」

「悪い相手ではないらしい」

こう弟に述べる。

「まだ会ってはいないがな」

「そう。まずは会ってからだね」

「どちらにしろ近いうちに私も結婚する」

このことは公約に近かった。

「近いうちにな」

「うん、じゃあね」

微笑んで兄の言葉に頷くジョージであった。

「その時は僕にも祝福させて」

「勿論だ。その時は」

「その時は？」

「私の弟としてだぞ」

このことを彼に言うのだった。

「このことは忘れないでくれ。いいな」

「うん、じゃあ僕の時もね」

「兄としてか」

「そうだよ。一緒にね」

「わかった。ではな」

二人は言葉で約束を交えさせる。口での約束だが絶対のものになつていた。

「楽しみにしているぞ」

「お互いね」

最後も微笑み合いであつた。二人はそれぞれの絆を何よりも深く強く感じていた。兄弟としての絆を。それは何があつても断ち切れるものではなかった。

兄弟 完

2
0
0
8
·
9
·
2
1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1890f/>

兄弟

2010年10月8日15時04分発行